

澄んだ青空と同じくらい

こころを研ぎ澄ませて

取り囲むすべてのものごとを

感じてほしい

生きているこの世界を

実感してほしい

研ぎ澄まされた心 ～いのちを思う齋場～

406738 宮司典弘

1

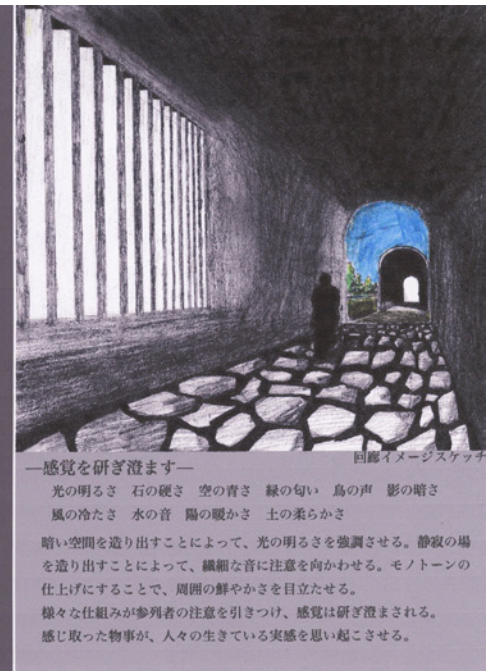
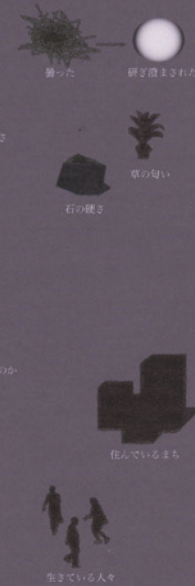
研ぎ澄まされた心で
あなたは何を思う？

悲しい？ 嬉しい？ 辛い？
そのいずれにも当てはまらない不思議な気持ち
ホカーンとした空っぽ感に育まれた想いの気持
そんな時の心を、研ぎ澄まされた心、と名付けよう

研ぎ澄まされた心は
どんな繊細なことででも感じ取る
風の音 草の匂い 虫の声 陽の暖かさ 光の明るさ
普段は気にも留めない些細なことからかもしれない
ただ、そんなもので溢れているのが
私たちの生きている世界なのだ

いのちを思う齋場
そこは故人と
生きている人のための場

生きていることを実感して欲しい
大切な人がいなくなったしまった今だからこそ
自分の存在を確認して欲しい
自分とはどこに生まれ、どこで育ち、今何をしているのか
どんな人たちは生まれ、どんな人々を思ったのか
そして、自分の生きている世界は如何なるものなのか
亡くなった人を想ふとともに、自分に無念を当てる
この機会を前向きなものとしよう
これから生きていくのはあなた
ここは、明日からの日々をよりよくするための
自らの再確認の場
だから心を研ぎ澄ませて
取り囲むすべての物事を感じ取り
あなたのいのちを思うて欲しい



—感覚を研ぎ澄ます—

光の明るさ 石の硬さ 空の青さ 緑の匂い 鳥の声 影の暗さ
風の冷たさ 水の音 陽の暖かさ 土の柔らかさ

暗い空間を造り出すことによって、光の明るさを強調させる。静寂の場を造り出すことによって、繊細な音に注意を向かわせる。モノトーンの仕上げにすることで、周囲の鮮やかさを目立たせる。
様々な仕組みが参列者の注意を引きつけ、感覚は研ぎ澄まされる。感じ取った物事が、人々の生きている実感を思い起こさせる。

図解イメージスケッチ

406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 2

別れの機会を

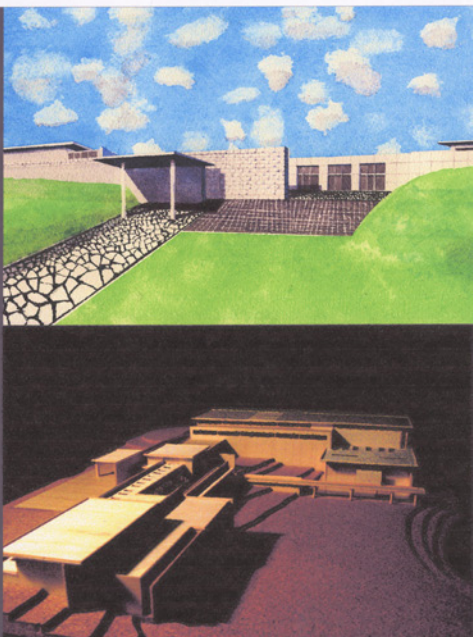
悲しみだけで染めないでほしい

故人を悼むと共に

人々を慈しむ場として

いのちを思う齋場は

あなたのところに訴えかける



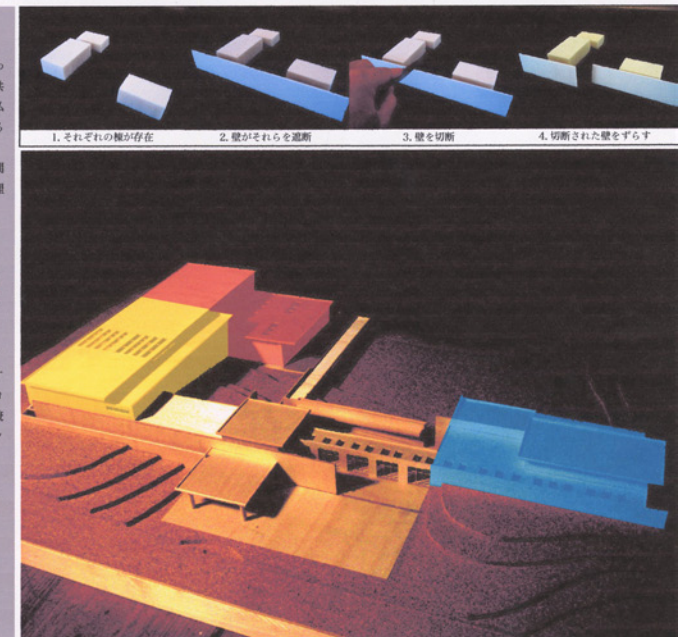
—壁の切断—

火葬場を隔離しない
歴史的に見て、火葬場は遠慮施設として人々から離れられ生活の場から切り離されてきた。立地、イメージ共に悪く、完全に別世界のものとして扱われてきた。私たちの社会と火葬場の間には大きな壁が存在しているのだ。
そこで、ここではその壁を切断する。切断された隙間から私たちの世界と火葬場はつながり、両者の溝は埋まる。

火葬場 社会 → 火葬場 社会
両者間には分厚い壁 壁を壊し、差別をなくす

三つのブロック
総合斎場の機能を、火葬、待合、葬祭(式場)の三つのグループに分類し、葬祭行為の流れに沿って配置する。火葬のみを行う団体はエントランスから火葬ブロック、待合ブロックを経て帰路につく。葬儀利用も兼ねる集団は、火葬ブロックへ向かう前に式場ブロックを経由する流れとなっている。

式場棟 → 火葬棟 → 待合棟
または
火葬棟 → 待合棟



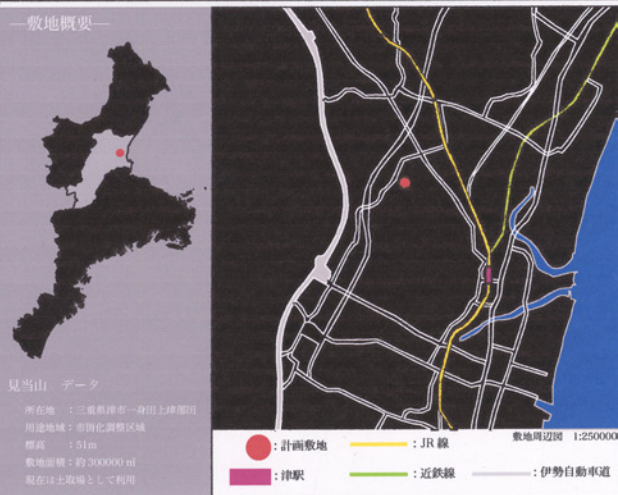
そのまちに生きた証を
感じ取ることが出来る場所

あなたの生きたまちは
どんな場所ですか？
わたしたちの生きるまちは
海が広がり、緑で溢れ
ゆっくりと時間が流れるまちです

そんなまちを
この場所から見渡せる
この山の上からなら臨むことが出来る
住み慣れた景色も
住んでいた家も
壮大に広がる海も
遥か彼方の水平線も

もしわたしが死んだら
あの水平線の向こう側へ行こうか
懐かしいこのまちでゆっくりしようか
それともこの山から
大切な人たちの暮らしを眺めてみようか

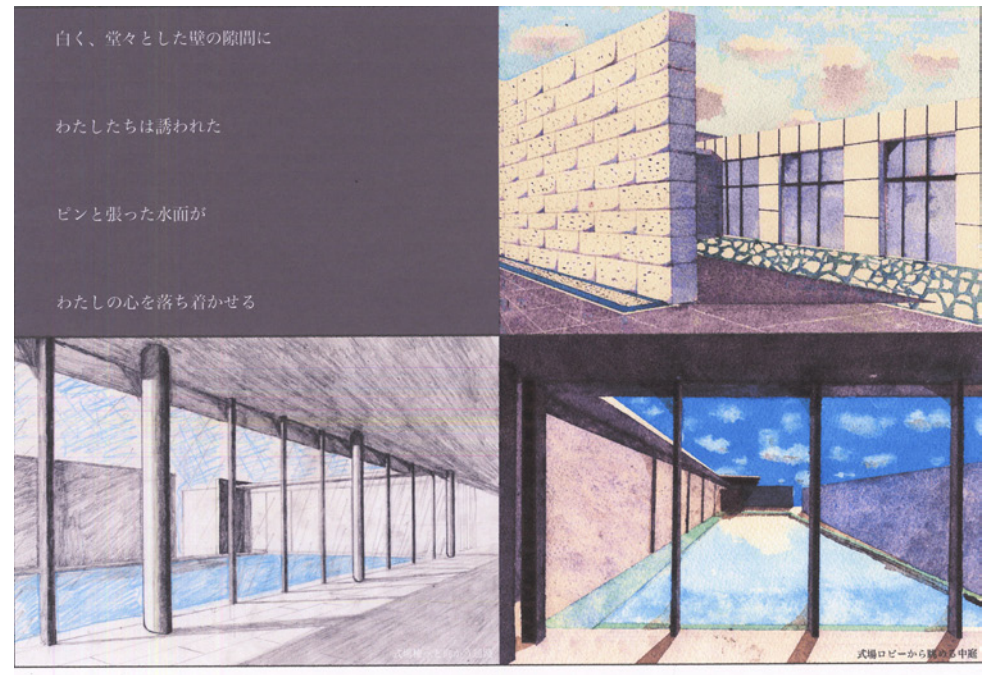
多くの人にとって
この山は岐路となるだろう
亡くなった人にも
生きていく人にとっても



見当山 データ
所在地：三重県津市一見山七津園田
用途地域：市街化調整区域
標高：51m
敷地面積：約300000㎡
現在は土取場として利用

●：計画敷地 ●：津駅
—：JR線 —：近鉄線
—：伊勢自動車道

白く、堂々とした壁の隙間に
わたしたちは誘われた
ピンと張った水面が
わたしの心を落ち着かせる



式場ロビーから見た中庭

406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 3

一見当山—

選定条件—

- 市街地を見下ろすことが出来る
- 津市を感じ取れる
- 死人は山に宿る

(現状)

- かつて存在した山道の面影はほとんどなく、現在では完全なる未開の地である
- 市街地とは一定の距離を保ちつつも、視覚的につながっている
- 土取場として使用されていたため、山頂付近の南西部は掘が広がっている
- 南西側の麓にはサーキット場が存在
- 山頂部以外は多くの木が生い茂る
- 周辺は田畑が広がる



配置図 1:1500



北東部からの見当山 山道入り口
未開の山頂 敷地内幹線路

406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 4

—心が何を感じるか?—

入り口〜式場棟
・水面の緊張感
・御影石の白さ
・影の黒さ

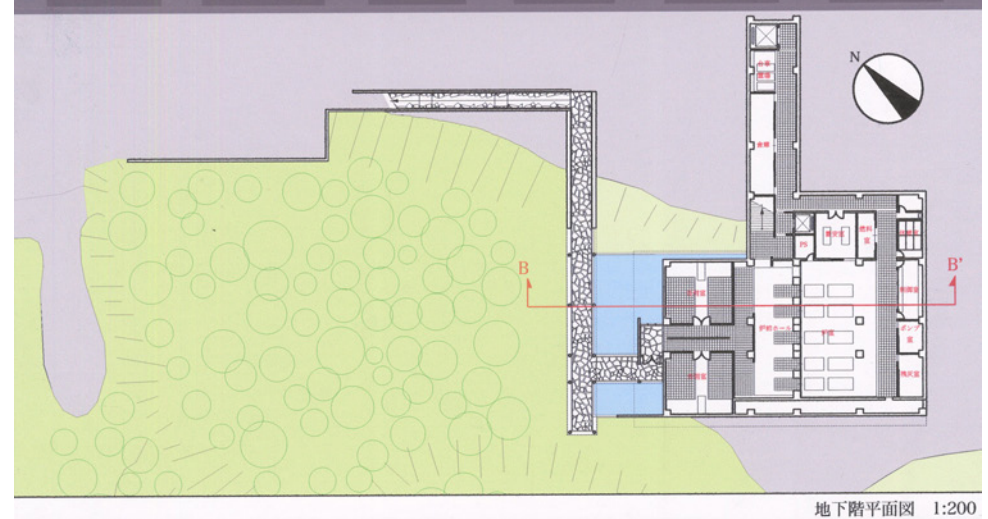
火葬棟
・石の冷たさ
・拡散光の柔らかさ
・足音の響き

回廊
・空気の温度
・緑の匂い
・虫、鳥の声

待合棟
・まちの表情
・空の色
・海の広さ

取骨室
・闇の暗さ
・直射光の眩しさ
・石の粗さ

故人との思い出を
自らのいのちを
生きている世界を

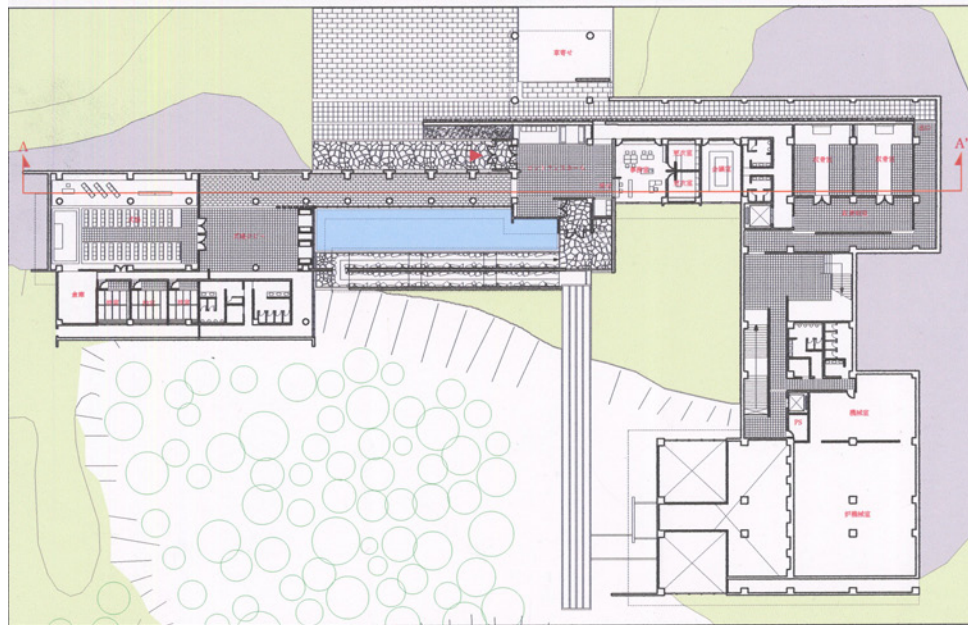


地下階平面図 1:200



406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 5

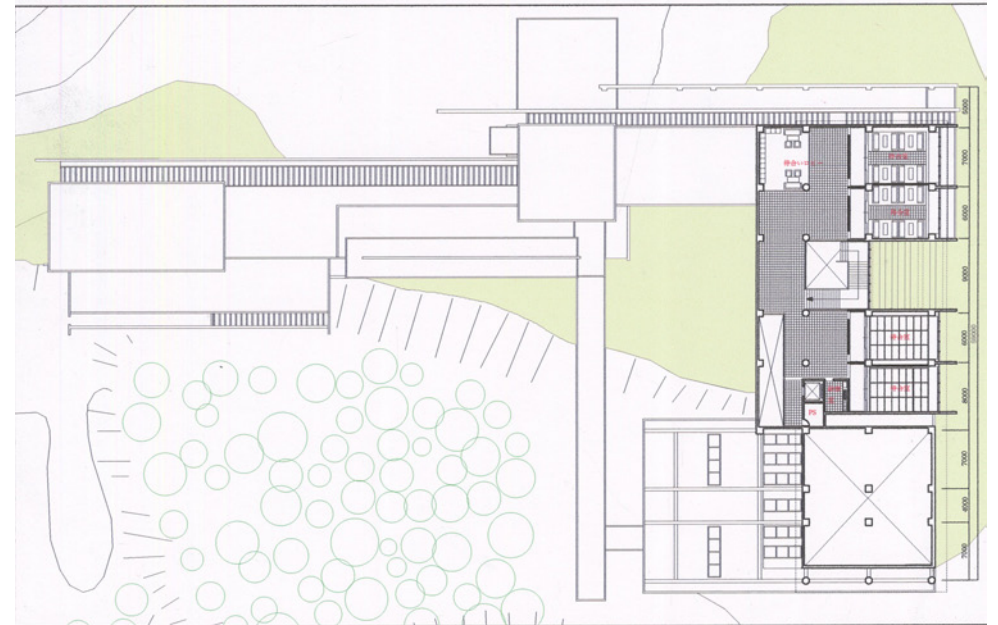


1階平面図 1:200



406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 6

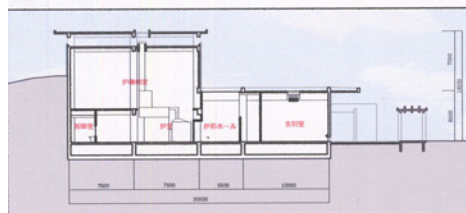


2階平面図 1:200



406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 7

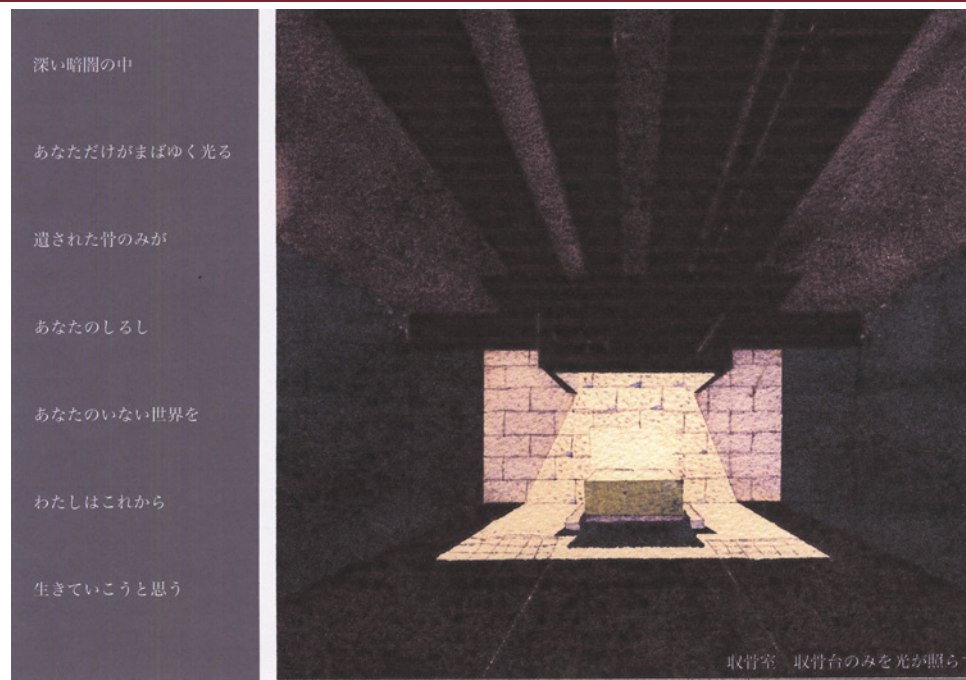
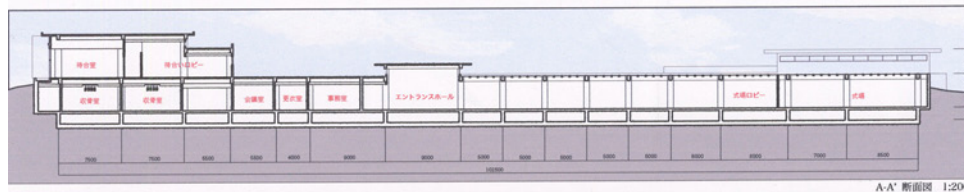


—郷土を思う待合室—

待合室は落ち着きの空間である。ここからは津のまちの象徴である伊勢湾を望むことができる。ここからそれらを見下ろしてもらい、自らの暮らす街はどのような場所であるかを再確認してもらおう。それと共にこの街での故人との思い出、自分がこの地に生きている証を感じてもらおう。

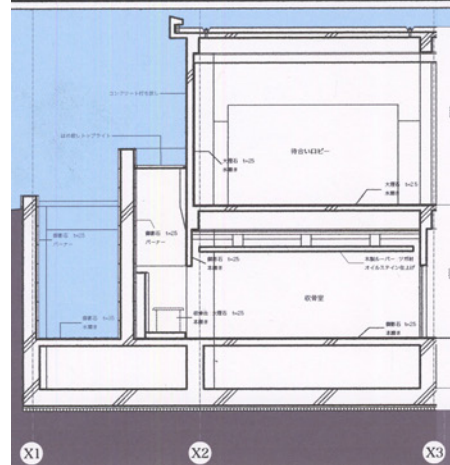
—山の上の斎場—

山の麓から見上げることが出来るのは、待合室部分の外部である。それだけに、まちからのファサードは市民の人々にとってこの斎場のシンボルとなる。ガラス張りのファサードは夜になると光り輝き、人々を暖かく見守る。このファサードを見て人々は死をいつもより身近に感じるようになる。



406738 宮司典弘

研ぎ澄まされた心 8



—光と闇の取骨室—

取骨室はこの斎場の中で唯一の暗い部屋である。取骨台上部のハイサイドライトのみがこの部屋の採光手段である。部屋の奥の壁面には、ざらざらした白い御影石が貼られている。それとは対照的に、部屋の手前部分は光沢のある黒い仕上げである。これらの対比が光の輪郭をより強調させ、取骨台のみを明るく照らす。

—最期の場として—

かたけない故人の姿を初めて目にするのが取骨室である。そこで参列者の人々は悲しみを通り越した無常観を感じるはずである。他の場面とは明らかに違った感情を持つ場であるのだ。そのため取骨室は、他の諸室群とは明確に区別する必要がある。故に意図的に暗い空間を創造し、参列者の感情を抑える空間となっている。

